様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３５３０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６４６３２２６

研究課題名（和文）医療の意思決定プロセスにおける患者の自己決定と家族の効力感に関する研究

研究課題名（英文）The patient self-determination and family efficacy of health care decision-making process

研究代表者
伊東　美佐江（ITO, MISAE）

川崎医療福祉大学・医療福祉学部・教授

研究者番号：００３３５７５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　がんに罹患した患者のエンドオブライフについての意思決定において，医療者との関係が関連し，病名の告知によって及ぼす要因が異なり，多様であることが示唆された．
　意思決定能力のある患者は，意思決定への家族の包含の意向はさまざまであり，家族は患者の意向とは必ずしも一致していない．特にエンドオブライフにおける治療の意思決定について，患者は、家族に感謝し、迷惑をかけたくないと想っていた。家族は決められない気持ちの揺らぎがあるなか，患者と人生を共に歩む覚悟をしていた．高齢がん患者の子どもという壮年期にある家族は，仕事との調整があり，患者の治療の意思決定時にも重要な役割を担うための家族への支援が求められる．

研究成果の概要（英文）：Decision making at the end of life by cancer patients and their families reflects the relationship with health care professionals, of which factors vary, depending on the presence of disclosure of the disease. There are various decision-making preferences in the patients toward family involvement.
For decision making regarding end-of-life treatment, patients appreciated their families and didn’t want to cause any inconveniences. For treatment options, the families had to choose either one way or the other, which caused anxiety in families, considering the patient’s wishes. While their families decided to go through life with the patients, those in the late middle age, including elderly cancer patients, had to adjust their work, which requires support among families who play an important role and even decide the patient's treatment.

研究分野：基礎看護学

キーワード：意思決定　自己決定　家族　効力感　看護倫理　エンドオブライフ

１．研究開始当初の背景

判断能力のある患者の医療における意思決定に家族が大きく関与していることは否めず，患者や家族が最終的に納得のいく決断をするために，結果のみならず意思決定プロセスも含めた探求が継続して必要である．

わが国の医療に関する意思決定において患者の自律原則を大切にしているが，患者の家族は重要な役割を担っている．患者や家族が最終的に納得のいく決断をするためには，家族を含むこととその患者の意向が一致することが重要である．また，患者の自己決定と家族意思決定の効力感について，治療の決定という結果のみならず意思決定プロセスも含めた多角的な探求が依然として不可欠である．

欧米と日本における倫理問題の事情の相違を指摘されるなか，治療の選択という意思決定の文脈のなかで，判断能力のある患者とその家族がどのように意思決定しているのか，また，その家族の意思決定する効力感に，どのような要因が関連しているのかについて，家族のあり様は明らかにされていなかった．

２．研究の目的

本研究では，医療の意思決定プロセスにおける患者の自己決定と家族の意思決定の効力感について，文献検討から明らかにし，研究枠組みの構成を検討した．そして，医療の意思決定プロセスにおいて，判断能力のある患者は家族とどのように意思決定を行っているのか，家族が意思決定する効力感と家族の調和の維持に関する家族のなかの現象を明らかにすることを目的とした．

３．研究の方法

(1)文献検討

医学中央雑誌 Web 版を用い，「がん」and「家族」and「意思決定」をキーワードとして原著論文を検索し，論文で対象としているものは小児以外に絞った．収集された文献毎に論文分析基礎カードを作成し，文献毎に主題をおいている研究内容を明らかにした．それらの研究内容の類似しているものをまとめ抽出度を上げカテゴリーとして分類し，悪性新生物に罹患し終末期にある患者の意思決定について，家族がどのように影響しているのかを明らかにし，研究枠組みの構成を検討した．

(2) 医療の意思決定プロセスにおける判断能力のある患者と家族のあり様

日本の医療の意思決定において，判断能力のある患者の自己決定と家族の意思決定の効力感について，文献検討や今までの研究結果から面接内容を精選した．実施する研究計画を完成し，本研究代表者の所属する倫理審査委員会や協力病院にあれば倫理審査委員会に申請し承認を得て実施した．

研究代表者である伊東が研究の総括を行い，研究分担者である村上・服鳥・松本・小野は，文献検討，データ集と分析を行った．研究協力者である長崎と片岡に文献検討やデータ収集の協力を得た．また，研究協力者である Dr. Marie T. Nolan と Dr. Susan Turale に，医療の意思決定における患者の自己決定と家族に関して，国際的な看護倫理学見地からの助言を得た．

本研究から得られた結果をまとめ，成果の発表を行った．

調査対象は，西日本にある 2 つの医院から，入院経験のある患者とその家族を対象とし，構造的ならびに半構造的質問項目を用いた面接調査を実施した．調査内容は，医療の意思決定プロセスにおける判断能力のある患者と家族の意思決定状況，ならびに家族意思決定の効力感などであった．倫理的配慮について，研究の目的や方法，データの取り扱いや研究参加者の自由意思と秘匿性など，具体的にわかりやすく説明し，書面にて同意を得た．面接調査の場所や日時は，対象者の体調や希望に合わせて，プライバシーが確保できる場所で実施した．得られた語りから逐語録を作成し，質的帰納的に分析を行った．

４．研究成果

本研究目的を達成するために，以下の通り，実施した．

(1)文献検討

健康を障害され入院している患者とその家族は，非日常的な医療に関する意思決定を求められる．がんに罹患した患者の終末期医療における意思決定に関する文献から，患者とその家族の意思決定には医療者との関係が関連しており，病名の告知の有無によって及ぼす要因の異なることが，和文献から示唆された．

患者の医療における意思決定に関して，家族は，病名の未告知では，医療者との関係，医療への期待，患者の死期，介護への希望，介護を行う上での不安，病院への思い入れが影響要因として考えられた．未告知による揺らぎ，未告知による後悔，未告知の選択の納得が患者のために意思決定する効力に関連していた．また，病名の告知では，患者の意思がわからないことによる困難感，患者の思いを知ったことによる困惑，患者本人の意思とは異なる決断，死別後の後悔や葛藤，精一杯のことをしたとの思いが指摘されていた．

また，高齢者本人の意思決定に課題のある状況には，認知障害に伴うコミュニケーション障害，加齢に伴う身体機能低下，高齢者のもつ高いコンプライアンス意識，高齢者自身の自律性の過小評価が指摘されていた．高齢

者家族は，代理決定に伴う課題，高齢者と家族の意向の相違が意思決定影響していた．

判断能力のある患者の家族の効力感に関して研究は行われていなかったが，患者の家族の意思決定に影響を及ぼす要因は多様であることが推測された．

(2) 医療の意思決定プロセスにおける判断能力のある患者と家族のあり様

研究協力者である Dr. Marie T. Nolan と Dr. Susan Turale ともに，研究の現状や研究の進め方について，意見や情報交換を通して，医療の意思決定プロセスにおける判断能力のある患者の家族の包含度に対する意向と家族の意思決定の効力感とその支援について，検討した．

研究代表者の所属する機関の倫理委員会において承認後，2 施設（1 施設では施設内倫理委員会の承認を得た）にて，入院経験のある在宅高齢患者とその家族 7 組に実施した．患者の性別は男性 3 名，女性 4 名であり，その家族はすべて女性で，配偶者 3 名，子ども 3 名，親が 1 名であった．意思決定能力のある患者は，意思決定への家族の包含はさまざまであり，家族の考える家族を包含した意思決定への患者の意向と患者の意向そのものとは必ずしも一致していない．しかし，患者の医療の意思決定における家族の参加は求められ，家族は重要な役割を期待されている．

特にエンドオブライフにおいて，かかりつけ医の下から治療を受ける病院の主治医の下で治療を受ける際にも，患者の家族は重要な役割を担っている．患者は，エンドオブライフにおける治療の意思決定について，疾病になることを気にしていなかったが，病いに罹患し，治療を受けることを決めた．そして，自然に過ごそうと病いにあらがわず，医療者との関係の良さを感じ，自分の体に起こっている病いにどのように対応しようかと考えながら，成り行きにまかせていた．そのなかで，病いに罹患するまでの家族との関係を認識しながら，家族が一生懸命考えてくれることに感謝し，家族に迷惑をかけたくないと家族を想っていた．

一方，家族は，家族は治療の選択は二者択一であり，患者の気持ちを考えながらも，気持ちの揺らぎを感じながら決め事である治療をともに決定していた．患者のかかりつけ医が最期まで患者を診てくれる存在であると認識するまでの過程が明らかとなった．患者と最期までずっと一緒にいることを覚悟し，仕事相手への申し訳なさのなかで，患者と仕事の時間を調整していた．

患者とともに生きていく家族の意思決定では，治療の決め事を通して，かかりつけ医の存在が大きくなっていた．決して意思決定にうまく関われるかわからないなか，意思決定時の決められない気持ちの揺らぎや，かかりつけ医と主治医との間で葛藤する家族の思いがあることを理解しなければならない．また，高齢がん患者の子どもという壮年期にある家族は，仕事と患者との時間を調整しなければならない立場であることを理解し，患者の治療の意思決定時にも重要な役割を担うための支援が必要である．

また，臨床看護師との事例検討会では，特に高齢者の退院支援において，患者と家族の合意形成における力，退院後のケアの調整力や療養場所の移行準備の視点から看護介入を行う点での討議を行った．

患者とその家族が終末期において意思決定しながらよりよく過ごすためには，患者や家族が人生の最終段階における医療や生き方を話し合っておくことが必要だと考えられる．また，医療者は患者と家族が納得した意思決定を行うために，確実な情報提供を行い，心に寄り添い親身になって関わる看護を行うことが必要だと考えられる．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

Misae Ito, Keiko Hattori, Kyoko Murakami, Sue Turale, and Takuma Ichihashi. Decision making preferences toward the assumptive clinical cases. Annals of Nursing and Practice，査読有 (Accepted).

〔学会発表〕（計 13 件）

① 村上京子，伊東美佐江．事例検討により看護倫理・家族看護を考える－退院の意思決定支援と倫理－. 第 17 回山口県遺伝看護卒後教育セミナー, 2017 年 2 月 9 日，山口大学医学部保健看護学科（山口県宇部市）．

② Hattori Keiko, Ito Misae, Keiko Matsumoto, Ono Satoko. Family functioning as a predictor of preferable patterns of end-of -life decision-making among Japan elders. 第 36 回 日本看護科学学会学術集会，10 December 2016，東京国際フォーラム（東京都千代田区）．

③ Satoko Ono, Misae Ito, Keiko Hattori, Keiko Matsumoto, Kayoko Hayashi, Keisuke Hino, Emiko Nagasaki. Perception of Inpatient toward Decision-Making about Healthcare and Family's Involvement. The 4th China Japan Korea Nursing Conference, 13 November 2016, Beijing International Convention Center（Beijing, China）.

④ 招聘講演：Misae Ito & Keiko Matsumoto. Home Care Needs of Family Members caring for Demented Elderly in Japan. In Symposium Tackling Challenges in Long-term Care for Older Populations: An International Perspective. Centre for Gerontological Nursing, School of Nursing, the Hong Kong Polytechnic University, Inaugural Conference, 25 May 2016, Hong Kong Polytechnic University (Hong Kong, China).

⑤ Misae Ito, Satoko Ono, Keiko Matsumoto, Keiko Hattori, Takako Hiramatsu, & Yudai Nakase. Family's perceptions about decision-making in health care for old-old elderly patients. Centre for Gerontological Nursing, School of Nursing, the Hong Kong Polytechnic University, Inaugural Conference, 25 May 2016, Hong Kong Polytechnic University (Honk Kong, China).

⑥ Satoko Ono, Misae Ito, Keiko Matsumoto, Kayoko Hayashi, Keiko Hattori, Yudai Nakase, & Keisuke Hino. Decision-making preference in healthcare toward competent elderly Japanese inpatients in latter-stage. Centre for Gerontological Nursing, School of Nursing, the Hong Kong Polytechnic University, Inaugural Conference, 25 May 2016, Hong Kong Polytechnic University (Honk Kong, China).

⑦ Eri Kataoka & Misae Ito. Family Decision about the Treatment Options at the Sudden Change for a Patient with Serious Stroke Condition. Honor Society of Nursing, Sigma Theta Tau International 43d Biennial Convention, 7–11 November 2015, Las Vegas, (Nevada, USA).

⑧ 伊東美佐江，服鳥景子，松本啓子，市橋拓磨，中瀬雄大，村上京子．医療の意思決定プロセスへの家族の包含に対する認識．日本家族看護学会第 22 回学術集会，2015 年 9 月 5-6 日，国際医療福祉大学（神奈川県小田原市）．

⑨ 服鳥景子，伊東美佐江．団塊世代が考える「よい死」について事例研究．日本家族看護学会第 22 回学術集会，2015 年 9 月 5-6 日，国際医療福祉大学（神奈川県小田原市）．

⑩ 片岡恵理，伊東美佐江．急変時の治療方針の決定をゆだねられた家族が脳卒中発症から生命危機状態を脱するまでの思い．日本看護研究学会第 41 回学術集会，2015 年 8 月 22-23 日，広島国際会議場（広島県広島市）．

⑪ 長崎恵美子，服鳥景子，伊東美佐江．倫理的葛藤をもつ家族における倫理に関する理論の活用状況の文献検討．日本家族看護学会第 21 回学術集会，2014 年 8 月 9-10 日，川崎医療福祉大学（岡山県倉敷市）．

⑫ 伊東美佐江，宅和志保美，楢崎粧子，服鳥景子，松本啓子，村上京子．医療における高齢者の意思決定を尊重するうえでの課題と支援．日本家族看護学会第 21 回学術集会，2014 年 8 月 9-10 日，川崎医療福祉大学（岡山県倉敷市）．

⑬ 交流集会．Katherine Heinze，村上京子，秋鹿都子，伊東美佐江．親のゆらぐ意思決定のプロセスへの支援．日本家族看護学会第 21 回学術集会，2014 年 8 月 9-10 日，川崎医療福祉大学（岡山県倉敷市）．

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

６．研究組織

(1)研究代表者

伊東　美佐江（ITO，Misae）
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・教授
研究者番号：00335754

(2)研究分担者

服鳥　景子（HATTORI，Keiko　）
岐阜聖徳学園大学・看護学部・准教授
研究者番号：10335755

松本　啓子（MATSUMOTO，Keiko）
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・教授
研究者番号：70249556

村上　京子（MURAKAMI，Kyoko）
山口大学・医学（系）研究科・教授
研究者番号：10294662

小野　聡子（ONO，Satoko）
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・講師
研究者番号：20610702

(3)連携研究者

長崎　恵美子（NAGASAKI，Emiko）
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・助教
研究者番号：70781558

(4)研究協力者

片岡　恵理（KATAOKA，Eri）
川崎医科大学附属病院・看護師

ノーラン　マリーT.
（NOLAN，　Marie T. ）
Professor, School of Nursing,
The Johns Hopkins University, USA

トウラーリ　スー（TURALE，Sue）
Visiting Professor, Faculty of Nursing,
Chiang Mai University, Thailand